

# オノマトペの様態副詞における助詞の有無

峯 正志

## はじめに

日本語にはオノマトペと呼ばれる言語要素が豊富で様々に用いられるが、主として副詞として用いられることが多い。その際、次のような現象を見せることがある。

- (1) 「ワイヤーでギイギイ音をさせて引っ張って……」『面影橋』 p.165
- (2) 「ギイギイとワイヤー・ロープを巻き取る音までが聞こえる。」同書 p.166

(1)においては擬音語である「ギイギイ」は助詞「と」を伴わず裸のまま現れているが、(2)においては助詞「と」と共に現れている。このような場合、「と」がある場合と無い場合ではどのように意味が異なるのであろうか。それとも全くの自由変異なのであろうか。

本稿の目的は、この助詞「と」が現れた場合に、それが現れない場合とどのような意味の違いがあるのかという点を明らかにすることである。

## I. 助詞「と」と様態副詞

まず、考察の対象を限定しておこう。本稿で対象とするオノマトペは、擬音語、擬声語、擬態語のいずれも対象とするが、統語的には副詞の用法を対象とする。その副詞としての用法には、田守・スコウラップ (1999) によると<sup>1</sup>、1) 様態副詞、2) 結果副詞、3) 程度副詞、4) 頻度副詞があるという。これは意味的な基準による用法の区別である。下にそれぞれの例文を掲げておく。

### (3)様態副詞

頭の中で何かはパチンと弾けた。同書 p.43

三森は鷲羽山で聞いた言葉をしみじみと思い返した。同書 p.234

1 同書 p.47ff.

(4) 結果副詞

体がドロドロに溶ける。同書 p.27

亜衣子が女優としてピカピカに輝いている頃だった。同書 p.44

(5) 程度副詞

それがすっかり衰えてしまって……。同書 p.64

ここまで来ると、人の数もめっきり多くなる。同書 p.290

(6) 頻度副詞

ちょいちょい行くことにしている。(田守・スコウラップ (1999) p.55)

このうち上記の現象を示すのは様態副詞と程度副詞である<sup>2</sup>が、程度副詞の場合は比較的使用頻度が低いとの指摘<sup>3</sup>があり、本稿では1) の様態副詞に限定する。

## II. 田守・スコウラップ (1999) の記述

オノマトペを総合的に扱った田守・スコウラップ (1999) はこの問題を正面から扱っているので、本章でそれを見てみよう。まず「日本語オノマトペは、文中で副詞として機能するとき、その音韻形態および統語的・意味的機能によって、助詞との共起の仕方が異なる。」として<sup>4</sup>、

- ①助詞「と」を随意的に伴うもの
- ②通常助詞を伴わないもの
- ③「と」を伴った方が好ましいもの
- ④「と」を義務的に伴うもの
- ⑤「に」を義務的に伴うもの

の5種類に分類した。このうち5) は、助詞が「と」でないこと、この場合のオノマトペが「結果副詞」として用いられているという点で1)～4) と異なっているため、ここでは除外する。

---

2 結果副詞の場合は助詞が「と」でなく「に」になる。なお「と」を伴う結果副詞の例を田守・スコウラップ (1991) は掲げているが、意味的には結果副詞と捉えられるかも知れないが、助詞が異なることから結果副詞として扱うことには慎重になるべきであろう。

3 同書 p.53

4 同書 p.64ff.

さて、残りの4種をそれぞれ順に見ていく。

①が本稿の直接の対象となるものであるが、これは「カタカタ・カタカタと」、「ザブザブ・ザブザブと」のようなCVCVという2モーラの反復形や、「キンキン・キンキンと」といった(C)VNまたは(C)VVの反復形、「はっきり・はっきりと」、「ぼんやり・ぼんやりと」のような(C)VNCVriの音韻形態をもったもの等がそうであるとしている。

①は様態副詞として使われるものだが、同じ2モーラ反復形のオノマトペでも、頻度副詞、程度副詞として機能するものは、②の通常助詞を伴わないものとして分類されるという。例としては「ちょいちょい」、「どしどし」や「グングン」、「すっかり」等が挙げられている。ここで「通常」と出ているのは、「と」の付加を許容する話者も存在するからとしている。

③の「と」を伴った方が好ましいものとしては、(C)VCVriまたはCVCVNの反復形を持つオノマトペを挙げている。これらのオノマトペは、「と」の伴わない例も存在するものの、伴った方が安定した文になるという。例として「フワリフワリと」、「ピカリピカリと」等が挙げられている。

④の「と」を義務的に伴うものは、①～③以外の音韻形態を持つ、様態副詞として機能するオノマトペであるとする。例として「ぱっと」、「ぐっと」、「コンと」、「ポンと」、「パラッと」、「バタンと」等が挙げられている。

ここまでの議論では、「と」の出現が音韻的条件にのみ基づいているように見えるが、同書ではさらに議論を進め、別な条件が「と」の出現に関わっていると主張する。

同書はまずこの場合の助詞の「と」と引用の助詞「と」との関連を指摘する。そして、1) 擬音オノマトペは擬態オノマトペよりも引用的に用いられやすい、2) 「と」を義務的に伴うオノマトペは「と」を必要としないものよりも引用的に用いられやすい、3) 異形はそのもとのオノマトペよりも引用的に用いられやすい、といった点から、「オノマトペが引用的に用いられやすいほど、オノマトペ度が高く、語彙性は低い」という結論を導き出す。

ここでいうオノマトペ度とは、「ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度」を指し、語彙性とは「オノマトペと推測される語が言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度」を指す。直接的な模倣として認識されればされるほど通常の語彙としては認めにくくなると考えられるため、オノマトペ度が高いほど語彙性は低くなり、また逆にオノマトペ度が低いほど語彙性は高くなる。例えば、物をたたく音として「カンカン」はよく使うが、「グワーン」はそれほどでもない。これを上の用語で説明すれば、「グワーン」の方がより音を忠実に再現していると考えら

れるので、オノマトペ度が高い。また「カンカン」の方が「グワーン」よりも語彙としての定着しているので語彙性が高いと考えるのである。これを反映して、「鍋をカンカンたたく。」は言えるが、「\*鍋をグワーンたたく。」は言えないわけである。

そして、オノマトペ度の高い、つまり語彙性の低い表現はどのような効果を持った表現になるかという点、「もっとも具体的な描写力に富み、類像的で、直接的で、生き生きとした臨場感がある」表現になるという。

同書の結論をまとめると、オノマトペ度の高い（語彙性の低い）オノマトペの場合には「と」が現れやすく、オノマトペ度の低い（語彙性の高い）オノマトペの場合には「と」が現れにくいということになる。

### Ⅲ. 田守・スコウラップ（1999）の記述の問題点

では、上の記述に問題点はないのであろうか。

まず、音韻的条件について述べた①～④についてはどうであろうか。

①と④についてはその通りである。①のオノマトペについては「と」の付いたもの、付かないもの両方の形が存在し、同じ文脈でどちらを使っても取り立てておかしくはない場合が多い。④についても例外はないように思われる。促音で音節を終わることは出来ないし、撥音で終わる場合も、（内省では）2音節では不安定な感じがする。

問題は②と③である。これはどちらの場合も①と同様に「と」を伴う形と伴わない形の両方が存在する。通常助詞が付かないとしている②については、確かに「すっかり」のように「と」が極めて付きにくいようなものもあるが、同書が「と」の付きうる例として挙げているように「めきめき・めきめきと」、「めつきり・めつきりと」等はどちらも普通に使うように思われる。同書が「伴わない」例として挙げている「ちよくちよく」や「グングン」も筆者の内省では「と」と共に使うことは普通にあるように思われる。ただし筆者のような話者もいることは同書にちゃんと記されている。

③についても両方の語形が存在するが、このことも同書は記述している。従って、問題はあるにしても、②および③については現状では上のように記述するしかないように思われる。

では、「引用的に用いられるかどうか」という意味的な要因についてはどうであろうか。

これについては、オノマトペ度が高い場合はその通りであると思われる。確かに聞き慣れないオノマトペ表現の場合には「と」を用いないと座りが悪い。

しかしながらオノマトペ度が低い場合は「と」が現れないかということそうではなく、

現れたり現れなかったりするるのである。もしオノマトペ度という基準だけに頼ると、同じオノマトペが使われた場合には、どのような状況であっても、そのオノマトペ度に応じて、同じ表現が現れることになるが、果たしてそうだろうか。

例えば、上で挙げた「ギイギイ」という擬音だが、これはロープの引っ張られる音としてそれほど特殊な擬音とは言えない。従ってこの場合には「と」が必ず付くとは言えないことになるが、逆に必ず付かないとも言えないのである。

従って、オノマトペ度が低い場合には、また別の基準が関わっているように思われる。

以上を整理すると、「と」が現れるかどうかは、まず次の1)と2)の手順を踏んでいるように思われる。

#### 1) 音韻的要因

まず、後ろに促音を持つもの等(第2章で出てきた④に当たるもの)は、「と」が義務的となる<sup>5</sup>。

#### 2) 情報量的<sup>6</sup>要因

オノマトペ度が非常に高いものは「と」が義務的となる。

では、これ以外の場合、つまり④に当たる音形をもたず、さらにオノマトペ度が低いようなものは一体「と」を取るのだろうか、取らないのだろうか。

これについて次章で議論する。

### IV. 情報の焦点と助詞の有無

基本的には田守・スコウラップ(1999)の指摘は正しいものと思う。しかし、彼らの指摘する第二の要因、すなわち情報量的要因は、もっと別な要因の一つの現れと捉えることが可能であると思われる。それは「情報の焦点(以下、単に焦点と呼ぶ)」である。

焦点の定義として次のように定義する<sup>7</sup>。

---

5 もちろん、田守・スコウラップ(1999) p.84ff. で述べられている文外独立用法(同書 p.86の例: びりびりつ。彼女が彼から来た手紙を破った。)のようなものは除く。

6 オノマトペ度が高いか低いかは情報量の多寡と相関しているので、このように言い換えた。

7 高見(1995) p.136における定義である。

(7)焦点＝重要度が高い情報：話し手がある文を発話する際、聞き手がその文中のある要素の出現を予測できないと話し手が見なす時、その要素はその文の焦点であり、重要度が高い情報である。言い換えれば、話し手が聞き手に特に伝達したい部分、つまり断定している部分を焦点、または重要度が高い情報と呼ぶ。

以下、「焦点」がある場合に助詞「と」が現れやすく、そうでない場合には助詞「と」は現れにくいことを見ていく。

しかしまず前提として、この区別は実際に書かれたり話されたりする場合には、非常に微妙な差しか存在せず、ほとんどの場合両方の形を入れ替えてもそれ程違和感が感じられないような場合が多いことを確認しておきたい。

(8)そんなことをいろいろと考えていたんだけど、予定が変わっちゃって……。

同書 p.61

(9)ええ、私は元気よ、いろいろやらなくちゃいけないことがあるから、失礼するわ。

同書 p.62

『面影橋』からの例文であるが、両者の現れる場面はわずか数行しか離れていない。前後の文脈を考慮に入れても、それぞれもう一方の語形と交代可能である。

しかしそれにもかかわらず、内省では確かに違いが存在するように思われる。

情報の焦点がはっきりと現れる典型的な場面は、疑問詞に対する答えの文である。次のような問いに対する答えの文としてはどちらが適切だろうか。

(9)(あまり笑わない人として知られている人が笑ったと聞いて、)

え、あの人が笑ったって？一体どんな風に笑ったの？

(9a)ニヤニヤと笑ったんですよ。

(9b)？ニヤニヤ笑ったんですよ。

(10)新しい目覚まし買ったの？どんな風に鳴るの？

(10a)リンリンと鳴るんだ。

(10b)？リンリン鳴るんだ。

「ニヤニヤ」も「リンリン」もそれぞれ下の例文に見られるように、助詞「と」無し

で使われうるオノマトペである。

(11)男がニヤニヤ笑っている。

(12)目覚ましがリンリン鳴っている。

しかし、(9)や(10)の答えとして使う場合は、助詞「と」を伴った文の方が、そうでない場合よりもわずかに座りがいいようである。

次に、初級の教科書等で動物の鳴き声が日本語でどのように表現されるかを示す場合は、どう表現されるだろうか。

(13a)犬はワンワンと鳴きます。

(13b) \*犬はワンワン鳴きます。

この場合は、犬がどのように鳴くのか相手に知らせる構文であるから、当然「ワンワン」の部分に焦点が来る。従って、このような場合には「と」は省略できないように思われる。だからといってワンワンというオノマトペが「と」を全く省略できないというわけではない。単に「犬が鳴いている」という状況を伝えるという場合には「犬がワンワン鳴いている。」としても大丈夫である。この場合は「鳴いている」という情報が重要なのであって、「ワンワン」という情報は単に付帯的に伝えているだけなので、助詞の「と」無しで使われるのだと思われる。

次に、後置文での振る舞い方を見てみよう。後置文とは次のような文である<sup>8</sup>。

(14)太郎は花子と京都へ行ったの？

(15)太郎は花子と行ったの。京都へ？

(16)太郎は京都へ行ったの。花子と？

日本語では動詞直前の位置が焦点の位置である<sup>9</sup>。(14)では、「京都へ」が焦点となる。それに対して、(15)、(16)では、焦点はそれぞれ「花子と」と「京都へ」である。文末に移動した要素は焦点とは解釈されず、補足的な情報として解釈される。このように補

---

8 高見(1997) p.8以下の記述による。例文も同書に載せてあるものをそのまま使用した。

9 様態の副詞は、もっとも自然な文中の位置が動詞の直前であるため「この位置にあるから助詞を伴う」のかどうか判定できず、後置文によるテストを使用した。

足的な情報を文末に移動させた文が後置文である。この文末の要素が焦点を持たないことは、次のような例から明らかである。

- (17) 太郎は花子とどこへ行ったの？
- (18) 彼は花子と京都へ行った。
- (19) \*彼は花子と行った。京都へ。

(18)は行き先を問う文であるから、「京都へ」に焦点のある(19)は適格である。それに対し、(19)が不適格となるのは、焦点のあるべき「京都へ」に焦点が置かれていないからである。このように、日本語では後置要素に焦点が現れてはいけない。高見 (1997) はこれについて次のような仮説を立てている<sup>10</sup>。

- (19)日本語の後置文に対する機能的制約：日本語の後置文は、後置要素に焦点以外の要素が現れる場合にのみ適格となる。

さて、これを念頭にオノマトペの様態副詞を見てみよう。

- (20a) テストの前なのに片町で買い物していたの。のんびり？
- (20b) ?テストの前なのに片町で買い物していたの。のんびりと？
- (21a) 働きすぎなんだから、温泉にでもつかった方がいいですよ、ゆっくり。
- (21b) ?働きすぎなんだから、温泉にでもつかった方がいいですよ、ゆっくりと。
- (22a) 目障りだから歩き回るな、ウロウロ。
- (22b) ?目障りだから歩き回るな、ウロウロと。

いずれの例においても、助詞の「と」を伴わない方が座りがよいようである。従って焦点がないときは「と」を伴わない形の方が用いられやすいと言える。

このように、オノマトペ様態副詞に焦点が来ると、助詞「と」が現れ、焦点が来ないと「と」が現れない傾向があることが分かる。

情報の焦点は、情動的に重要な部分であるから、当然情報量が多く、従って引用的

---

10 同書 p.9.



に用いられることが多いであろう。情報の焦点が関与しているということが正しいならば、田守・スコウラップ (1999) の指摘もその論理的帰結と捉えられるのではないだろうか。

## V. 結 論

以上の議論をまとめてみよう。

オノマトペ様態副詞には、助詞の「と」を義務的に取るものと、随意的に取るものの区別がある。義務的に取るものについては、田守・スコウラップ (1999) の記述しているように、(1)音韻的要因と(2)情報量的要因の二つが考えられる。音韻的要因というのは、後ろに促音を持つもの等(第2章で出てきた④に当たるもの)が助詞の「と」を音的な支えとして必要とするということであり、情報量的要因とは、オノマトペ度が高いということであった。

しかし、助詞の「と」を随意的に取るものについては、オノマトペ度とは異なる情報量的要因が関わっている可能性があることを本稿は指摘した。それはすなわち「情報の焦点」である。オノマトペ度はそれぞれのオノマトペ様態副詞の固有の情報量を表すもので、文脈によって変化することはないが、「情報の焦点」はそうではなく、文脈によって変わりうるものである。そのため文脈によって、つまり焦点がある(情報量が多い)時には助詞の「と」が現れ、焦点がない(情報量が少ない)時には現れない、という現象が起きるのだと考えられる。

## VI. 終わりに

本稿では、オノマトペ度とは異なる情報的要因、すなわち「情報の焦点」が、オノマトペ様態副詞の助詞「と」の有無に関わっている可能性があることを指摘した<sup>11</sup>。し

11 第2章の⑤(「に」を義務的に伴うもの)は本稿の考察対象には含まれていないが、もし仮にこれも「と」を伴う様態副詞と同様の原理が働いているとすると、助詞「に」が省略不可能であることも理解しやすいように思われる。結果副詞は様態副詞と異なり、意味的に焦点が置かれやすいからである。

なお、峯(2000)では、オノマトペ様態副詞と時を表す副詞のそれぞれの助詞の現れ方が非常によく似ていることを指摘した。従って、時を表す副詞の助詞の出現にも情報の焦点が関わっている可能性は高い。またそのように指摘した論考も存在する。益岡(1997)では、時を表す複文における助詞「に」の有無を焦点の有無で説明している。

a. 友達を待っているあいだにこの考えを思い付いたのだ。

b. 友達を待っているあいだこの本を読んでいたのだ。

「ために」と「ため」の違いに関しても同様の指摘がある。今尾(1991)参照。

かし、本稿ではその根拠を筆者の内省に頼っている。本稿での結果を更に客観的に示すには、文献や音声資料の用例の調査や、アンケートでの調査等が必要となろう。それらがこれからの課題である。

#### 引用文献

- 今尾ゆき子 (1991) 「カラ、ノデ、タメ –その選択条件をめぐって–」『日本語学』10巻12号
- 高見 健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較 –受身文、後置文の分析–』くろしお出版。東京。
- (1997) 『日英語対照による英語学演習シリーズ4 機能的統語論』くろしお出版。東京。
- 田守・スコウラップ (1999) 『オノマトペ –形態と意味–』くろしお出版。東京。
- 益岡 隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版。東京。
- 峯 正志 (2000) 「オノマトペと時を表す副詞に見られる類似性について」『金沢大学留学生センター紀要』第3号。金沢。
- 例文引用：阿刀田高 (1991) 『面影橋』中公文庫。東京。

## The particle "TO" and onomatopoeic manner adverbials

Masashi Mine

**Abstract** The Japanese onomatopoeic manner adverbials are used with or without the particle TO, depending on the context. Tamori and Schourup (1999) explain this phenomenon with the term "mimeticity", saying that it is with the particle TO when it is high in mimeticity.

This paper points out that "information focus" is also relevant to this phenomenon. This theory explains very well why the manner adverbials that are low in mimeticity can take the particle TO in some contexts, while the "mimeticity" theory can't.